



季節の花便り

二十四節気の花飾り

白露 秋分

虫の音とともに秋の気配を感じる季節。一年を二十四の季節に分け、四季の移り変わりを折り込んだ二十四節気。9月は「白露」と「秋分」の季節です。季節の移ろいとともに暮らしの中に花のある風景を取り入れてみてはいかがでしょうか。

* * * * *

白露
「夜中に大気が冷え、草花に朝露が宿る頃。」

ブーケ ¥5,500 (税込)



使用花材
(マム、エリシジウム、ユーカリ、アカシアなど)

初秋を迎え、朝夕が幾分しのぎやすくなる頃。この時期は「マム」がおすすです。マムとは菊の学名に由来する呼び名になります。近年は日本においてもマムと呼ぶことがポピュラーになり、菊のイメージが変化しつつあります。典型的な菊とは異なる咲き方や、色の美しい品種が次々と登場し、元来の日持ちの良さもあって、再評価されている状況にあります。

秋分

「昼と夜の長さが同じになる日。次第に秋が深まります。」

アレンジ ¥4,400 (税込)



使用花材
(ケイトウ、リンドウ、サンゴジュ、キイチゴなど)

空もようやく秋色を帯びる頃。この時期は「ケイトウ(鶏頭)」がおすすです。ケイトウはニワトリのトサカに似ていることからその名がついた花。夏、秋の季節に見頃を迎える種類が多く、店頭には様々な品種が並びます。ベルベットのような光沢と質感のトサカ系。ポリウムのような球状の久留米系。ふさふさした円錐形の柔らかな花穂が特徴の羽毛系などなど。

* * * * *

9月は重陽の節句にあたり、マムが店内を彩ります。様々な品種からお好みのマムを見つけてみてはいかがでしょうか。秋の七草とよく合うケイトウ。華やかに部屋を秋色に彩ってみては、今月は「マム」と「ケイトウ」を飾って、秋を始めてみてはいかがでしょうかでしょう。

花かがみ

HANA-KAGAMI

'23 9

石木屋園芸

発行人/小笠原 肇 発行所/名古屋園芸株式会社
〒460-0005 名古屋市中区東様2-18-13 tel.052-931-8701
http://nagoyaengei.co.jp/

秋をイマドキに



「本草通串証図」 前田利保編

全五冊内五巻はシダ植物図のみ収録。画師は山下守胤、山下一胤、松浦守美、木村立嶽らが描き、本編と同様嘉永六年刊。記載図は琉球産のリウウビンタイ。亮軒記

information

2023年10月～ 花の講座
オススメ 1day レッスン

1日だけのお手軽レッスン！テーマに合わせて色々とご準備しました。講師を務めるスタッフが丁寧にお話しますので、初めての方でも安心してご参加いただけます。「つくる楽しみ・育てる楽しみ」がいっぱいの「花の講座」。花もちが良くなる秋の季節から始めてみませんか？

講座No.10 秋色ナチュラルリース
10/28 (土) 10:30~11:30
講習費：1,100円 材料費：4,400円
ナチュラルな雰囲気のリースを作ります。ゆっくりとドライになっていく様子も趣があります。



講座No.34 ハロウィンを楽しむ 多肉の寄せ植え
10/13(金) 10:30~11:30
講習費：1,100円 材料費：4,400円
ぶくぶく不思議なカタチの多肉植物を使って、ハロウィンにぴったりの寄せ植えを作ります。

◇お申し込みは
花の講座専用電話 TEL: 052-937-3391
受付時間 月～金曜日 10:00~17:00
Webでのお申し込みは24時間OK!

名古屋園芸 検索



花の講座 公式Instagram

花の博物館

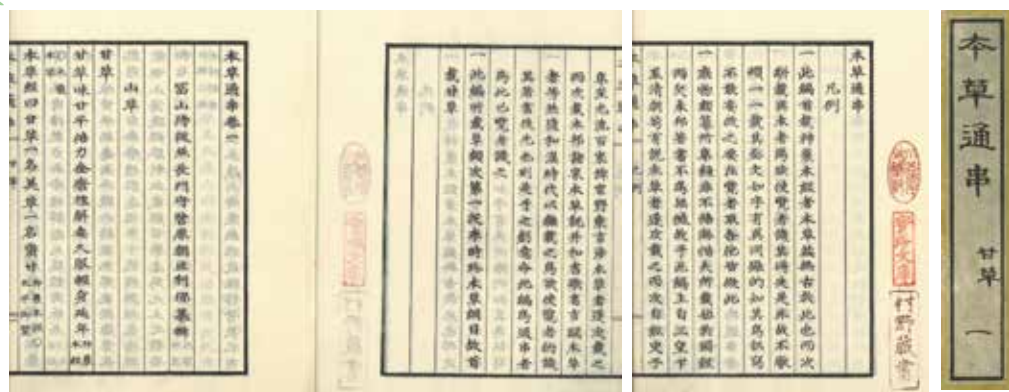
第332回

本草通串

九四巻五六冊

前田利保纂輯 富山藩刊
嘉永五年年初から同年末までに刊行

小笠原左衛門尉亮軒



編著者前田利保は、寛政から嘉永頃の富山藩主、植物大好き大名として知られ、主として本草学を研究する「赫鞭会」(しゃべんかい)を黒田榮善(黒田藩主)、大馬大助(旗本)、山本裕室(本草学者)らと組織し、研究、意見の交換の場として「日新会」、「赫鞭会」会員等の育てた珍草、奇木の持ち寄り展示会を度々開催し、出品記録として「奇草小図」、「日新会図」と題して、小型本ながら、版本手彩色として刊行した。当文庫では、可能な限り前田利保著作本を収集し、保存に努力しているが今回は「本草通串」と対をなす「本草通串証図」を紹介する。
内容は纂輯者の序、跋はなく、巻頭は凡例から始まる。「神農本草経」、「本草綱目」を主体とし、和漢の本草説はいうに及ばず類書に至るまで、項目(本草綱目に倣う)別に記載あり、本題の示す通り、正に通串の書物である。今ならパソコンに入力し、項目別に取り出せば容易なことと思うが、おそらく多くの藩士が殿のお道楽に付き合わされたことであろう。
この本は藩の刊行本であり、刊行後まもなく幕末動乱期を迎えたのか、刊行部数が極端に少なく揃いの伝本は極めて少ないようで、牧野富太郎先生も随筆の中で「時々端本に揃っていない本」を見かけるがそれでも非常に高価で遂に私は所持できずにいる」と書かれている。当文庫本はイギリス人のフランク・ホーレー氏旧蔵本でその前が名古屋の蔵書家村野時哉氏であり、巻初にホーレー氏手書きメモに、「一九四一年に千三百円で求めた本である」と記している。当文庫には昭和五四年縁あって蔵することになった。

主催「尾張鉢?展実行委員会」

尾張鉢?展

2023年9月23日(土)~11月5日(日) (会場) 昭和美術館

～小笠原左衛門尉亮軒氏 記念講演会～
「江戸時代の鉢植え園芸」
11月4日(土) 13時30分～ (受付13時から)

〈会場〉昭和美術館 (講演会～別館、呈茶～南山寿荘2階)
〈定員〉申込み先着40名
〈参加費〉3000円 (入館料込み、呈茶、御菓子)
〈申込方法〉以下のアドレスでEメールにてお受けします。
古橋尚 (フルハシタカシ) sotoyama@pd6.so-net.ne.jp
「参加希望、氏名、住所、電話番号」を、送信ください。

おわりばち ったに 尾張鉢?展

主催「尾張鉢?展実行委員会」

世界に類を見ない「江戸の園芸文化」。平和が続いた江戸時代、様々な植物を育て愛好する趣味が、大名から庶民に至るまで国内を席巻しました。そして、必要とされた植木鉢も急速に進化発展。とくに瀬戸においては尾張藩管轄のもと、デザインを凝らした濃紺色と白の対比が美しい磁器製植木鉢が大人気となり、ヨーロッパなどにも輸出されました。

この植木鉢は、特別な意味を込めて「尾張鉢」と呼ばれるようになり、今でも盆栽などで大切に使われています。しかし現在では目にする機会は少なく、幻の焼き物といっても過言ではありません。この度、名古屋市内では初めての「尾張鉢」に特化した展覧会を、昭和美術館にて開催いたします。瀬戸独自の技術が、江戸の粋と融合して生まれた驚きの美の世界。昭和美術館開館45周年記念「花とともに」の展示、そして秋を装う日本庭園と共に楽しみください。

〈会場〉昭和美術館 2F展示室 (住所) 名古屋市昭和区汐見町4-1
〈会期〉2023年9月23日(土)～11月5日(日)
〈休館日〉10/9を除く月曜日・火曜日と、10/11(水)
〈開館時間〉10:00～16:30 (入館受付は16時まで)
〈入館料〉一般1000円、65歳以上900円
(昭和美術館1F、開館45周年記念展及び庭園観覧料を含みます)

～小笠原左衛門尉亮軒氏 記念講演会～
「江戸時代に発展した鉢植え園芸」

〈日時〉11月4日(土) 13時30分～ (受付13時から)
〈会場〉昭和美術館 (講演会～別館、呈茶～南山寿荘2階)
〈定員〉申込み先着40名
〈参加費〉3000円 (入館料込み、呈茶、御菓子)
〈申込方法〉以下のアドレスでEメールにてお受けします。
古橋尚 (フルハシタカシ) sotoyama@pd6.so-net.ne.jp
「参加希望、氏名、住所、電話番号」を、送信ください。